

潮流

人口と経済

理事長 皆川 芳嗣

現在の多くの日本人は日本という国の人口が1億人を超えていることについて、昔からもそうであり、あたり前のことであると認識しているのではない。しかし実際はそうではない。私は1954年生まれだが、その時の人口は8千9百万人で、小学5年生の頃（1966年）に人口が1億人を超えたと新聞、テレビで大々的に報道されたことを昨日のように記憶している。日本の人口はその後も順調に増え続け、2000年代初頭に1億2千7百万人台でピークを迎えることとなった。明治時代以降、日本の人口が増大するスピードとほぼ軌を一にして日本の経済が成長してきているので、人口と経済は表裏一体だというのが人々の実感ではなかろうか。経済学的にも人口の増大は、一面で労働力の増強を通じ生産力を押し上げるし、もう一面で国内消費を増やすことで需要の増大をもたらす。このサプライ、デマンド両面の均衡ある増大が経済成長ということになるわけである。世界各国の経済の動向を観察すると成長の著しい国々で人口の増大がいわば「ボーナス」として寄与していると分析されている。

これから日本の人口は歴史始まって以来、初めての減少期を迎えるのである。ご案内のように国立社会保障・人口問題研究所の将来人口推計（出生中位）によると、日本の人口は2050年頃に1億人を割り、その後も減少し22世紀には5千万人を下回るところまで減少するとされている。日本の人口が1億人台を超えている期間は一世紀に満たず終わることになる。このような将来見通しは、人々に表裏一体とされる経済の不可避的な縮小をもたらすのではとの漠然たる不安をもたらしている。

日本という国の将来はどうなるのか、またどうすればよいのか人々の見立ては一樣ではない。楽観論者の中には、経済成長を支える人材が不足すると言うのであれば世界から優秀な人々をどんどん日本に迎え入れ一種の多民族国家として生きてゆけば良い。最近議論が喧しい外国人労働者の研修制度の拡大などではなまぬるい。本格的に移民に取り組みという論者もいる。

一方、全く別の意見もある。例えば日本の歴史の中で江戸時代を礼賛する人々である。いわく人口も経済も大きな成長が無いいわば定常状態だった江戸時代だが、世界に誇りうる芸術文化が花開き、自然と共生する持続型経済社会が構築されていた。人々は充ち足りて幸福に暮らしていたとき、と言うわけである。今後日本は人口減少の時代を迎えるが、成長に汲々とせず、華美、贅沢を求めない江戸時代に範を求めれば心配する必要はないというわけである。

極論を紹介したが、どちらも無理があるようである。経済の成長を至上命題として国の姿を激変させるようなリスクをとれ。そのため自国の都合だけで人材をもらってこい、という考え方はいかがなものだろうか。また、一方の意見も江戸時代の負の側面をあまりに軽視してはいないか。経世済民の

観点で見れば、江戸時代は貧窮にあえぐ人口が国民の過半はいたのではないか。ひとたび冷害が来れば飢饉で多くの村々が丸ごと潰れていたのである。武士は食わねど高楊枝でいいのかもしれないが、農民は食いつめて死んでいったのである。

となるとどうするかだが、本稿では人口と経済についての二つの重要な論点を指摘することにとどめたい。一つめは、経済の成長はもう一つの重要な要素である1人当たりの労働生産性によっても規定されるということである。トラクターを自動運転で2台動かせば物的生産性は2倍近くになる訳である。日本が誇るロボット、AIの技術を十分に活用できれば人口の減少即経済の縮小ではないことになる。（ただその具体化のためには投資が必要であり、その原資を得るためにはやはり一定の成長が必要という面もある。）二つめは、人々の幸福や豊かさと経済の大きさは深く関係しているということである。宗教家や哲学者ではない我々凡人にとって精神の豊かさを得るにもやはり金が必要なのである。GDPがどんずばり国民の幸福の尺度でないことは当然だが、経世済民を考える上で無視することも出来ないのである。